

令和2年度 第2回秋田県環境教育等推進協議会 議事概要

1 日 時

令和2年9月3日（木） 午前10時～午前12時

2 場 所

秋田県議会棟 2階 特別会議室

3 出席者

○委 員（敬称略）

佐藤玲子、大塚久隆、部谷正樹、川田貴之、木口倫、石黒直樹、川越政美、
福岡真理子、後藤千春、櫻庭直美（中山恭幸委員代理）、川村之聡 以上11名

○事務局

温暖化対策課長 中田美英子 ほか4名

4 協議事項

始めに事務局が、前回の協議内容の訂正と補足を行った。

体験の機会の場合は人材は認定できない制度であることと、制度の概要について説明。

（1）現計画の取組の評価について

①施策の5本柱ごとの取組の評価と5つの目標の達成状況

○大塚委員

「学校の教育方針の変更や児童生徒数の減少等により、県が実施する環境学習に係る事業への参加校（者）が減少してきている。」という表現は、環境教育を軽く見ている印象を与える。バックデータに基づく表現であればこの表現でかまわないが、「学校に求められる教育課題の増加や児童生徒数の減少等により、」というような、現状として学校にかかる負担が大きくなっていることが分かるような表現にしていきたい。

○事務局

大塚委員のご意見に沿って修正する。

○木口座長

どのような評価を吸い上げてこの評価となったのか。

○事務局

基本的には庁内会議の各事業主体の課室から出てきた現状、今後に向けた課題から取り出しているほか、庁内会議の委員からの意見を反映している。

○福岡委員

秋田県全域の校長先生に対する基本的な調査として、どのように副読本を活用できるのかといった現状把握のためのアンケートを実施しているか。

○事務局

担当の教員レベルでのアンケートは実施しているが、校長先生の意見は把握していない。

○福岡委員

学校現場に知ってもらうためにも、また学校教育の現場のニーズが何で、どのようなニーズがあるか分析できていた方がより良い計画になると思う。

○木口座長

行動計画を作る上で、評価のしやすさというものが非常に重要だと思うので、福岡委員の意見を次の骨子案に反映させてもらいたい。

○後藤委員

受講者の年代層が高く、若年層の受講者を増やしていく必要があるということだが、本業を持たれている方は本業を優先させるので、今後は主婦層を対象に加えていくとか、あるいはカルチャークラブ的な要素も含めるといったようなことも考えてみてはどうか。端的に言うとエコマイスターに登録された方を現場で活用する機会やマッチングに課題があるのではないかと。学校へ提供する教材について、教科書に準拠しているとか関連する単元で活用しやすいものになっているのか。実際に現場で使われている学校の先生方のご意見をお伺いしたい。

○事務局

教材に関しては、北東北三県の知事サミットで合意した共同の取組で、3県の理科の先生たちが集まって実際に現場で使えるものを作ったので、現場の声を十分に反映したものとなっている。

○後藤委員

学校現場の多忙化に問題があるということか。

○事務局

学校の課題が増えていくと時間を取りにくいという傾向はある。

○後藤委員

教材が教科書のどの部分で使えるかを示すなど、より具体的な使い方を示すと使いやすいと考える。

○木口座長

主婦層の活用に関してどうか。

○事務局

県民塾は参加しやすいように土日に行っており、女性の方の参加率が高く、積極的に参加していただいている。ただ、全体的に自己研鑽的な感じで受講される方が多く、学んだことを外向けに発信していくという意欲のある方が受けてくださるともっといいと感じている。

○後藤委員

資格やライセンスを取ることが目標・目的ではなく、取ってからどうするかが重要。そういうシステム作りも必要になってくる。

○川田委員

生涯学習は、学んだ成果をどう還元したり昇華するのが難しい。生涯学習には幅があり、自分の趣味や教養的なものを学べるだけで満足される方、資格取得を目指している方というふうに、学び方も学ぶ内容も多種多様である。学んだ成果を活かして地域で活動していく環境づくり、知と行動の交流還元は、生涯学習の分野でも非常に重要。学んだことを活かして外部に発信していく「行動人（こうどうびと）」の講座を、生涯学習講座の中に位置づけて実施している。いろいろな機会を捉えて人材の活用や、教材の活用を図っていく必要がある。学校教育だけでなく一般の方向けに啓発していく機会を、多種多様に捉えてやっていくということも大事。

○木口座長

今、川田委員がおっしゃるように他の背景もあるので、単に、この目標達成に関しては受講者数というような形で一律に評価してしまうと、いろいろな弊害があるので齟齬が出てしまい、今のようなご意見ご提案が出てくると思うので、そこは今回の行動計画にしっかり反映させてもらえれば良いのではないかと思います。

(2) 第2次秋田県環境教育等に関する行動計画（骨子案）について

①「第2章 基本的な事項」

○木口座長

E S Dの考え方と「ふるさと教育」の整合性というのがよく分からなかった。E S Dのみの視点があるのか、それとも「ふるさと教育」のみの視点があるのか、両方の視点があるのか、そこがどのような関係性になっているのか。

○大塚委員

関連して、環境教育が対象になっているのは、一般企業や各種団体なども対象にしていると思う。ここに「ふるさと教育」を出していいものか若干疑問である。

○事務局

「ふるさと教育」は秋田版E S Dというふうに見える。郷土を愛する心を育てる、育むということは、秋田県の「ふるさと教育」ではほぼ網羅されているのではないかと思う。あえて秋田らしさを加えるために、「ふるさと教育」を入れた。環境教育は子どもだけでなく生涯学習の要素もあるので、当てはまらない部分もあるが秋田県の特徴ということで記載させていただいた。

○大塚委員

ふるさと教育を取り入れていただきありがたい。確かに「ふるさと教育」が秋田の特色であり、E S Dとも重複するところが大きい。

○櫻庭代理

「ふるさと教育」は、県教育委員会としては心の教育の充実と発展を目指し、学校教育共通実践課題として進めてきたもの。ふるさと教育は環境ということだけにとどまらず、様々な視点がここに含まれている。学校教育においては環境教育は、改めてまた何かやるということではなく、新たな視点で見直し、もっと充実させて意識していこうというような示し方をすると紛れがないと思う。E S Dの視点との関連は、「ふるさと教育」では地域を知ることだけにとどまらず、地域に向けて働きかけることや情報発信するということを大事にしていこうと進めており、持続可能な社会の創り手という視点ではつながることになると思う。

○木口座長

E S Dの概念と、「ふるさと教育」の内容が整合するような形での説明が必要。この行動計画は、一部の県民だけではなく県民全体に示す内容なので、「ふるさと教育」というのは秋田版E S Dなど、もっと分かりやすい説明が必要かと思う。

○福岡委員

E S Dの10年の時、国連大学のシンポジウムで、E S Dを通した教育に関しては「地域とは、歴史と繋がる場所、仲間と繋がる場所、仲間と課題が見つかる場所、その課題を仲間と解決する場所、そして地域とは未来へと繋がる場所」という素晴らしいキーワードがあった。これらを踏まえて分かりやすく整理すれば、「ふるさと教育」と整合性のとれた非常に良い計画になるのではないか。

②「第3章 実施すべき施策に関する事項」

○大塚委員

「(1) 学校等における環境教育」の内容・本質的な部分については、このとおりでいいと思う。これを市町村立の学校が読む時に、「～活用する」という書きぶりの所が紛れなく受け止めてもらえるか一考を要する。前回の原稿のように、行動計画の書き方が「～が大切です」であれば、違和感なく受け入れられると思う。

○事務局

今回示しているのは骨子案ということで、これがこの後肉付けされて、素案になり、成案になっていく。その途中で文言の訂正、ニュアンスの修正を十分配慮して行いたい。

○後藤委員

「(2) 地域等における環境教育」の部分には人材という要素が入る余地はないものか。

○事務局

体験の機会の場には入らないけれども、地域の資源には人も入ると思うので、今後、もう少し分かりやすい形で表現を工夫したい。

○佐藤委員

「(2) 地域等における環境教育」という所に、「社会教育施設や環境関連施設等の今ある施設を環境学習の場として」という文言があるが、これは県のものに限られるのか。

○事務局

主な取組は、主に県が行う行動計画であることから、情報の把握といった観点から国、県、市町村など公的な社会教育施設全てと考えている。

○佐藤委員

小さい子供には、自然と関わったり環境と関わったりする、子供用の場所というのがとても大切になってくる。例えば由利本荘市の「木のおもちゃ美術館」であるとか、能代市の木の学校とか、そういう施設も各地域にはたくさんあるのではないかな。子供から家族に環境の大事さというのが伝わっていくので、小さい子供も行ってみようと思う場所も幅広く載せていただきたい。

○事務局

対応させていただく。

○川越委員

「地域社会の歴史や文化に理解を深め」の文章に、「技能」という言葉があると伝統文化を継承していくと捉えられる。課題解決の知識・技能であると思うのだが、適切なのかな。

○事務局

これについては国の基本方針から引用したが、確かに異質な感じがしないでもないので、表現を工夫したい。

○石黒委員

学校や地域等における環境教育の場として、環境保全活動に積極的な企業や団体が書き込まれるということなのか。

○事務局

そのそおり。

○部谷委員

「2 人材の育成・活用」の「(1) 学校の教職員の資質の向上」の部分に関して、保護者が自然環境に慣れ親しんでいない、つまりは教員も実験ができない、外に出て環境をよく説明できない、という状況が見受けられる。高校教育の中でも総合的な探究の時間等を有効に活用できる教職員の育成を念頭においていただきたいと思う。

③「第4章 計画の推進体制」及び「2 評価・見直し」の数値目標に関して

○川田委員

こどもエコクラブの会員数、環境あきた県民塾の受講者数、ビューティフルサンデーの参加者数、学校へ提供する教材の授業での活用率、県とNPOとの協働取組事例数、この5つの項目を前回の時に選ばれた経緯を示していただきたい。

○事務局

柱ごとに考えたものであるが、当課が把握できるもので、よその部局にあまり迷惑をかけないでとれる数字の中で、代表的なものをとった。

○川田委員

アウトプットとアウトカムの違いで、目標の数値化にふさわしいものと、数値化するには難しいものがある。もし数値目標を設定することありきでないとすれば、例えば状況の変化がどのようなになるかというような表し方などを工夫されてもいいのではないかな。

○石黒委員

上位計画である環境基本計画との関係で、片一方に数値があつて片一方には数値がないというのはちょっとおかしい。その辺の調整を図っていただき、私たちにはその結果を示してもらふと良い。

○事務局

現在の環境基本計画に載っている3つの項目は、現行計画の数値目標を上位計画にピックアップした形になっている。環境基本計画もこの計画と平行して、今、改定作業中である。

○川村委員

環境基本計画の改定作業についても現在並行して行なっているが、そちらでも数値目標をどうしようかという議論が起こっている。この計画と環境基本計画は整合性をとるといふことにしているので、こちらで数値目標を挙げないものについては、基本的に環境基本計画の方でも挙げないということになる。

○川村委員

5つの柱について、それぞれ1個ずつの目標を挙げているが、成果を表しているか疑問もある。我々が考えている段階でも、なかなか適切なものがない。ただ、数値目標はあった方が進行管理の上ではやりやすいところもあるので、この会議の中で取扱を決めていただきたい。事務局側としては、どちらかというとな数値目標はなくてもよいのではと考えている。

○本口座長

評価を求められた場合、教育においては、評価できる部分とできない部分があるが、例えば資質を向上する機会をこのように増やしたとか、資質が向上した人がこのくらい増えたとかに関しては数値目標は設定しやすいと思う。そこを区別して、できる内容をセレクトするという方法もあると思う。この場で短時間で決めるのは難しいと思うので、継続協議若しくは次回の事務局の方で素案をまとめるに当たって、期限を決めて皆さんのご意見をメールで頂くような形にするとよいのではないかな。

○事務局

次回は主な取組にぶら下がる事業を示すので、それを見て使えるものをイメージできたらいいと考えている。

(3) その他

○本口座長

SDGsというのは全世界共通言語であると言われているが、そのやり方というのは、計画に関して積み上げ式の内容ではない。大胆な目標を立て、それに対して限られた時間の中で、どういうステップを踏まえて達成するのかというもので、到達できない目標もあるかもしれない。それを踏まえて、逆算的な思考（バックキャスト）でいくと、例えば「1 環境学習の機会・場づくり」で「現状と課題」をいきなり記載しているが、そうではなくて、目指すべき姿というのがあって、現状と課題があって、最終的には取組があって、その主な取組をバックキャストで考えて、どこまで何をしなくてはいけないのか時間軸に並べ替える、そんな作業が必要になると思う。そこまでやらないとSDGsの何を踏まえたんだと言われかねないという疑問もある。事務局のお考えをお聞かせいただきたい。

○事務局

まず、SDGsをどのように計画に落とし込んでいくかというところを、今回は意識して進めたいと考えている。具体的にどうやって落とし込むか非常に悩ましいところで、教育の行動計画ということになるとSDGsの目標4のターゲット4.7になるが、意識するのはこれだけでなく17の目標が少しずつちりばめられているという状況になると思っており、具体的な落とし込み方を悩んでいる。

○木口座長

「第3章 実施すべき施策に関する事項」の図で、「豊かな水と緑あふれる秋田」が仮に達成できていないとして、秋田の本当のあるべき姿というのを最初にもってきて、それに合わせて5つの柱のそれぞれが、どのようにあるべき姿に関係して具体的に組みんでいくのかという流れにしないと、これまでの行動計画の範疇からは出ない。もしそれをやらず、これまでどおりの積み上げ式の場合には、具体的な取組に17の目標をどう関連付けて進めていくのか、ということを考えていく必要がある。そこが今後考えるべきことだと思っている。

○事務局

SDGsについては、次まで考えておく。それが反映された資料を出すという前提で進めたいと思う。

○木口座長

どこまでSDGsを踏まえているのかということだと思うので、ご検討いただきたい。

○事務局

「豊かな水と緑あふれる秋田」を今後の10年守り育てていくことが非常に困難になってくる可能性がある。例えば人口減少、若者がいない、子供がいない、そういう状況の中でも守り育てていくという決意を見てもらいたい。

○木口座長

21世紀のどの段階で、何年までに何をやるのか、というところが明確になればいいと個人的には思う。

○木口座長

本日の協議事項について、この場で発言しきれなかった事、さらに詳しく聞きたいこと、意見等があれば、事務局に対してメールなどでお伝え頂ければと思う。事務局からの回答については、その内容に応じて委員の皆様と共有するという事にさせていただきたい。